炭鬼
禰豆子

畳に仰向けに横たわる少女――――
頬を紅潮させ潤んだ瞳でこちらを伺っている。
彼女の期待に応え麻柄の着物、そして下着の役目を果たす
腰巻をゆっくりとまくる。
フゥ～…
フゥ～…
あらわになった少女の白磁のような太もも、美しい縦筋、
そしてその上に装飾にように配された薄紅色の陰核、
それらがおりなす少女とは思えない妖艶さに思わず
見惚れる

暫く心を奪われていたところ、口枷を嵌められ言葉にならない少女の不満気な声が現実に引き戻す

彼女は自身の足を大きく割り開き自身の秘所を見せつけるようにして『はやくして』といわんばかりに誘っている

少女の誘惑に、限界に張り詰めた怒張を取り出すと
口枷の下で少女が淫蕩な笑みを浮かべたような気がした
刺激を待ちきれぬかのようにひくひくと蠢く
少女の淫らな秘裂に怒張をあてがい、一気に腰を落とす
ぱくっ
ひく
ひく…♥

벌렁벌렁
슈!
꿀꺽

たっぷりと淫らな蜜を湛えた少女の肉壷は激しく収縮し
埋め込また肉槌にありとあらゆる甘美な刺激をもたらす。
夢中で腰を打ち付けていると、次第に同じ調子で
少女はく可憐な嬌声をあげる
ぱんぱん
パンパンパンパンパンパン

少女の美しい声をもっと聴きたい欲望にかられ
戒めの口枷を外した。
この美しい獣に喰われるのであればそれも本望だ。
?
少女は一瞬戸惑った様子だったが、すぐに
自身の腰を揺すり、行為の続きを促す。
少女にとって少なくともこの時間は
血肉より淫楽が優先されていることに少し苦笑し安堵した
ぐっ
ぐぷっ
ぐぷっ
ぐっ
ぐぷっ

激しい注挿を再開すると
少女は悦楽にゆがんだ笑みを浮かべ
自らもさらに激しく腰をゆすりたてる
あッ♡
きゃッ♡
数刻であらゆる刺激が臨界に達しようとしていた
その予感を感じ取り、肉槌の最後の一撃を
少女の一番奥に向かい叩きつけた
パン!!パン!!パン!!パン!!

ひぁっ!
ビクビクビクッ!!!
ズ
ドビュ
ドビュ

意識が途切れそうなほどの激しい絶頂。
少女も自身の奥に大量に注がれる精の感触の
余韻に浸っている。

だが、わかっている。
数刻後、少女は陰茎を抜く間も与えず、行為の再開を求めることを。
そしてそれに抗えないことも。

眼前の美しく淫らな鬼は、無垢な少女のような笑顔で微笑んでいた。